

1 手がかりは「うっどんかた」

全国に点在する中川路さん発祥の地は鹿児島県指宿市の中小路集落だそうです。

中小路集落は、中ノ園、池堂、原田から成っており、国道より海手側の中ノ園に中川路さんが集中して住んでいました。しかし、中ノ園は、昭和60年頃に大規模な区画整理が行われ、かつての居住地の名残はほとんどなくなってしまいました。

40歳代以上の方々は当時の姿を記憶している世代ですが、当時の写真と言え人物の集合写真が多く、景色、ましてや集落内の様子を撮影したものは皆無と言っていいでしょう。

ただ、国土地理院のHPに区画整理前・昭和49年頃の航空写真が掲載されているので、興味がある方はぜひのぞいてみてください。

さて、地域の歴史をたどる上で一番の手がかりになるのは、文献はもちろん寺社仏閣や石碑などです。寺社仏閣は明治初年の廃仏毀釈により、全国的にも例を見ないほどに破壊され尽くされた鹿児島県です。公的な記録の集積地である寺社が破壊されてしまっただけではどうしようもありません。

そのような破壊の嵐をどのようにくぐりぬけたのか分かりませんが、県下には大小様々な「社」が残っており、中小路集落(中ノ園)にもその一つがありました。「うっどんかた」と呼ばれていた社です。この社を中心にして中川路さんたちの家々が集まり集落を形成していました。

「うっどんかた」は4畳ほどの広さの床を持ち、屋根がついていました。床下は1mもありませんが、子どもならば誰でももぐりこむことができました。また、社の周囲は、梅の木やビビンソなどいろいろな植物が植栽されており、子どもたちにとっては隠れ家的な遊び場になっていました。おとなは「子どもの神様だから」と、子どもたちがここでどんな遊び方をしても極めて寛容でした。

その「うっどんかた」に祀られていたのは「タイラノモリカタ」という人物でした。「指宿市誌」などを調べてみたところ、同様な造りの社は紹介されていますが、個々の社の成立・背景についてはわずしか見あたりませんでしたし、ましてや「タイラノモリカタ」という人物は見つけられませんでした。

区画整理のために「うっどんかた」はそのまま残ることはなく、コンクリートで固められた祠になりました。現在、祠の扉を開くと、5つの石が置いてあるだけです。この石にどのような意味づけがされていたのか分かりませんが、同様な形式はよく見られます。

区画整理の際に祠を建てた方が「タイラノモリカタ」が祀られていたと身内に語っているのですが、この方は2011年6月に60才代で急逝されました。彼が何を根拠に「タイラノモリカタ」の名前を取り上げたのかは分かりません。

また、こうした社に複数の神・人物を祀るということはよくありますが、「タイラノモリカタ」と「子どもの神様」がつながっているのか、それとも別なのかも分かりません。

ちなみに、「うっどんかた」という呼称自体にも謎があります。旧来、指宿地方の伝統的な信仰では、2つの神がよく祀られていました。一つが子女にやさしい内神様(ウッガンサア)であり、門・屋敷の中に小さな木の祠として祀られていたそうです。もう一つが厳しく祟りやすい森神(モイドン)です。「タイラノモリカタ」がモイドンの象徴なのか、ウッガンサアの象徴なのか、どちらの象徴なのでしょう、研究・検証していく必要があると思います。

また発音からすれば「うっどんかた」は「ウッガンサア」に近いですし、子どもにやさしいところも共通しています。つまり、「うっどんかた」という呼称からすれば、これは中ノ園の人々にとっての内神様だと言えます。しかし、末尾については「サア」というのが一般的であり、「カタ」と呼ぶことはないとし市誌は指摘しています。この違いの検証が今後求められます。

さらに、中川路さんたちの家の中には、先祖伝来の家系図や刀を持っていたという家が何軒かありました。いずれも太平洋戦争の空襲で焼けたり、金属の抛出でなくなったりしています。その家系図には平氏との関係が書かれていたという証言もあり、かつての武家となんらかの関係を持っていることは確かでしょうし、「タイラノモリカタ」という具体的な人名が出てきたこともその辺りに起因しているのではないかと思います。

2 タイラノモリカタ

「タイラノモリカタ」・・・調べてみると、桓武天皇に始まる桓武平氏の系列の中にその名前を見つけました・・・桓武天皇から10代目に「平盛方」という人物がいました。この人物は一体どのようなことをしたのでしょ

うか。平盛方について言及する前に、ここで、少し言葉の整理をしておきます。

「平家」と「平氏」はどう違うのでしょうか。「源氏」という用語はあっても「源家」という使い方はしません。実は平家は「平清盛」近親の平氏を意味しています。平氏はもっと広い言葉です。桓武天皇から続く流れ全体を指し示しています。桓武天皇から盛方までの系譜は下記の通りです。

桓武天皇---平国香---貞盛---維将---維時---直方---維方---平（阿多美）盛方---熊谷直貞---熊谷直実
となっています。

平盛方については、子・直貞の資料から様子をうかがうことができます。

平忠盛(清盛の父)は、三十三間堂の建立、千体仏を安置し、1132年に鳥羽上皇に寄進したことに対する恩賞として、内昇殿を許されます。平忠盛の権勢は年を追うごとに強くなっていき、その他の平氏をも圧倒していきます。これをねたんだ人々によって闇討ちが行われます(殿上闇討)。平盛方は忠盛を襲撃したグループの一員だったため、天皇の怒りに触れて処刑されます。

その時、子・直貞は赤子であり、乳母に抱かれて武蔵国大里郡熊谷郷に落ち延びました。成長後、所領もない寄寓の身でしたが、熊退治で名を上げ、所領を得たそうです。

ただ、平盛方自身については、ウィキペディア等を調べてみても、襲撃事件などのことについて詳細な事実は語られてはいません。平盛方とは一体どんな人物だったのでしょうか。

大雑把な枠組みで推論を組み立ててみました。この事件の以前から、平清盛が属する伊勢平氏の勢力が日の出の勢いで伸びていきます。既に西日本は伊勢平氏の傘下にありました。伊勢平氏によって取って代わられ勢いを失った平氏・その関係の者もたくさんいました。伊勢平氏はその恨みを買うこと・伊勢平氏の棟梁である忠盛が狙われることは当然の帰結と考えられます。

伊勢平氏の勃興によって勢力を失っていく・奪われていった人々の代表の一人が平盛方であったのではないかと考えます。かくして、敗北した直貞らが伊勢平氏の勢力の伸びきっていない東国へ盛方の一族・郎党が落ちのびていくことは当然の帰結と考えられます。

平盛方の正体はこれ以上は分かりません。

ましてや、関東地方へというベクトルに反して九州、しかも最南端の指宿の地に「盛方」の名を残す一族がいたのかについての謎は深まるばかりです。

3 父祖の地・長岡京

「中川路」の話なのに、ずっと平氏の話が続いています。もちろん歴史書に「中川路」は登場してきません。ただ推測として言えるのは、「中川路」が平盛方の子孫なのか、その郎党だったのか線引きは曖昧ですが、平盛方に対して忠誠心を持っていた人々だったことは確かなのでしょう。

「中川路」の祖先は、平盛方の没落とともに、その子・直貞らとともに京都から関東へ下ったのかもしれないし、京都に残ったかもしれません。いずれにしても、平盛方との縁で「中川路」のご先祖様が京都にいたと仮定することは難しい問題ではありません。

私はその場所を現在の京都府長岡京市ではなかったかと推測します。先述したように、平盛方からさかのぼること10代で桓武天皇に行き着きます。桓武天皇は平城京から長岡京に遷都し、その遷都が落ち着く間もなく平安京へとさらに遷都を敢行した天皇です。

桓武天皇、平氏、長岡京・・・このつながりにさらに驚くべき符号が重なってきます。

ここから、盛方の孫の熊谷直実の話をしてします。

関東地方で武将として誉れの高い人物で、源頼朝を支持して平家と戦い「平家物語」にも登場した人物でしたが、後半生は法然を師事し仏門に入りました。

熊谷直実はお寺をたくさん建てていますが、その中に京都、現在の京都府長岡京市の山手に念仏三昧院というお寺があります。これは後に光明寺という名前を天皇から与えられます。

盛方の子孫もしくは忠実な郎党である「中川路」の祖先は、盛方の孫・熊谷直実が関東から京都へ帰還したことを喜んだにちがいありません。

それは盛方の父祖の地への帰還でもあったからです。もしかすると、念仏三昧院のあった土地はもともと平盛方に縁のある何かがあったのかもしれない。非業の死を迎えた祖父を弔う孫という設定は、決して非現実的なことではないと思います。

「中川路」という名前は指宿市の「中小路」にたくさんいます。

この「中小路」と「中川路」は元々は同じで、「中小路」が元祖的な名前だったようです。「中小路」は京都にたくさんある地名でもあり名前でもあります。

そこで、「中小路」という姓のルーツを調べてみると、京都府向日市上上野町が発祥の地ということが分かりました。現在の阪急西向日駅の南東側に「北小路」「南小路」「西小路」という地名が今もあります。この辺りが「中小路」姓の発祥の地らしいです。

その「中小路」発祥の地から真西に向かって3kmほどのところに念仏三昧院(光明寺)があるのです。そして、ここはかつての長岡京の一部だったのです。

先ほど驚くべき符号と述べましたが、単に桓武天皇由来の地というだけではなく、関東に下り再び戻ってきた盛方の孫が建てた寺の場所が、「タイラノモリカタ」を祀った社を中心にできた「中小路」集落の「中川路」さんたちの発祥の地に近い、というよりは、ほとんど敷地みたいな場所なのです。

偶然の一言では片付けられないのではないのでしょうか。

4 西国へ下った「中川路」

ここから先、京都から鹿児島へ「中川路」のご先祖様たちがどうやってやってきたのかは手がかりが全くありません。現在と当時の人口比からしたら、総勢40人程度の一族になるのでせいぜい3～5家程度だったと予想されます。それが長岡京に残った「中小路」さん、鹿児島へ下った「中小路(中川路)」さんに分かれた理由も分かりません。

ここで、京都と鹿児島をどう結ぶか全くの迷宮に、いえ、歴史の闇に入り込んでしまいます。

いろいろな推測をしてみました、が、「中川路」さんがこの時代に名前を刻んでいるわけではないので、後々の事実とのつながりをどう作っていくのかは勝手に仮説を立ててしまうしかありません。

ただ、手がかりがないわけではありません。

平家政権の確立よりもずっと以前から、薩摩半島は桓武平氏の流れを組む薩摩平氏と呼ばれる一族が支配していました。

平盛方が亡くなる頃には、その薩摩平氏の一族が、河辺氏や指宿氏、谷山氏など現代の地名に続く名前を名乗っており、その中でも指宿地方を治めていた指宿氏の忠季が原田氏を名乗り始めます。

「中小路」に多い中川路・原田・池堂の3氏のうち、原田氏がこれにあたります。

原田氏は郡司として現在の十二町の中小路・原田を中心として指宿を支配しますが、その居城を原田城といい、現在の金毘羅神社の南東側の台形状の丘に砦が築かれていたようです。

鎌倉時代に作られた土地台帳には、指宿郡の田地面積が47町だったと記されています。一説では、この内、12町が原田氏の領地だったとされています。現在の十二町という地名はここに由来しています。

金毘羅神社の辺りからは十二町一帯を見下ろすことができます。支配者・原田氏にとっては格好の場所だったことだと思われます。

原田氏と中川路氏は祖が同じという伝承もありますが、確証はありません。

ここでも平氏とのつながりが出てくるのが不思議です。

ただ、先述した念仏三昧寺との関係で言えば、タイムラグが生じてきます。

寺の創建は1198年ですから既に鎌倉政権が誕生しており、薩摩平氏の人々が支配権を確立した時代からすれば60年ほど後世のことです。

とすれば、あくまで仮定の話ですが、1132年、殿上閥討の失敗により平盛方が処刑された際、「中川路」のご先祖様たちは、何らかの理由で盛方の子・直貞には付き従わず(付き従えず)、京都に残り、さらに、西国で支配権を伸ばしている伊勢平氏につき、九州・薩摩へ下ったのではないかと思います。

それが後世に薩摩平氏と呼ばれる一族であり、結果として指宿を支配することになった原田氏とともに村落を形成することになったのではないかと推測してみました。

さらに、中小路の村のつくりを見た時、武家屋敷とまでは言いませんが、「仮想敵」を想定してはいないかという想像も働いてしまいます。

中小路集落の北側には、約5～8m程度の深い谷間を形成した港川が流れています。小さな流れですが、ここより北側では十町と呼ばれる地域まで行かないと、これほど深い川はありません。天然の防壁になっています。そして、中小路の中の小集落の原田・池堂を通っている道筋がやたらと曲がりくねっていることも城の守備力を高める方法です。そして十二町全体を見渡せる高台にある城。

中川路の人々は出城のように城から平野部へと突出した形で集落を形成していますが、これは平野部全体への監視・城の防衛線の確保を図る上で重要な形だと思います。ふだんは農耕にいそしみつつ、いざとなれば「人をもって城となす」形を作っていたのではないかと思います。

5 最後に

また、「中小路」集落には「唐人踊り」という伝統芸能が継承されています。名前は「唐人」ですが、衣装や踊りで使われている言葉は琉球のものです。研究者の努力も届かずその言葉の内容は全て解読されたわけではありません。それが古代琉球語なのか、伝承されていくうちに鹿児島弁とまじって意味不明になってしまったのか分かりません。ただ、出自が沖縄であることは疑いようはありません。

「十二町」の南隣りは山川湊でした。宋との貿易以来、中国や沖縄との交流は大に行われ、それらの文化の影響を色濃く受けたことは必至です。山川湊はその拠点です。

「唐人踊り」は中小路だけでなく、鹿児島湾沿いの数カ所に伝えられていますが、それは江戸期の島津氏による琉球出兵の「副産物」かもしれません。島津氏に朝貢した琉球の人々は次回の人々が朝貢するまで人質にされました。

「中小路」の人々が琉球の人々の監視を任されていたのか、それともその他の関係があったのか分かりませんが、いずれにしても何らかの交流が行われたことは事実なのでしょう。その中で、琉球の伝統芸能を引き継いだと理解するのが適当だと思われます。いずれにしても、監視を任されるということは、それだけの権力を有していたとみなすべきでしょう。

その集団が中小路にいたと言っても過言ではありません。

ある「中川路」さんの高祖父は明治初年に亡くなっており戸籍が残っていました。天保11年10月8日生まれです。「天保の改革」の真っ最中に「中川路」として出生届を出していたのです。つまり、その時代には「中川路」の名字があったということです。名字があるということは武士に近い身分だったと推定されます。ただ、薩摩藩の家臣の名簿には「中川路」も「中小路」もありません。

状況証拠はあるにもかかわらず、決定打に欠ける・・・、ここに「中川路」の不思議があるのです。